
黒田官兵衛推理録「播州姫路毒皿数」

鳥取プロイラー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒田官兵衛推理録「播州姫路毒皿数」

【Nコード】

N9501M

【作者名】

鳥取ブロイラー

【あらすじ】

播磨国の若き武将黒田官兵衛。彼は自身の居城、姫路城で起きた奇怪な変死事件を解決する為に、その智謀を働かせる。

前ノ口上（前書き）

ばんしゅうひめじとくのさちかぞえ
播州姫路毒皿数

登場人物

- 黒田官兵衛……主人公。戦国乱世を気ままに生きる青年。
八代又助……官兵衛の従者にして友人。気苦労が絶えない。
彌子……黒田職隆付の侍女で官兵衛と又助の友人。くノ一っばい。
黒田職隆……播磨の大名小寺家に仕える、姫路城の城主。
津田蓬萊庵……黒田家に仕える侍医。
町ノ坪弾四朗……黒田家に逗留している壮年の武将。
新右衛門……黒田家に仕える小姓。
菊千代……黒田家に仕える小姓。
お蝶……黒田家に仕える新参女中。
お吉……黒田家に仕える女中長。

頻出用語解説

曲輪……城砦を何重かで取り囲む外壁部分から内側を指す言葉。

江戸時代では同様の物を本丸、二の丸、三の丸と
いう風に言った。

小姓……武家等の歳若い子弟が就く、武将の側で働く職業。

身辺警護や雑務といった役割の一方、行儀作法
を学んだりもする。

侍女……公家や武家に使える子女の事。

本作品では特に女中と区別して武将直属のエリー

ト的な扱い。

乱波……忍者の事。戦国時代にはこう呼んだ。他にも草の者、透波とも。

侍医……皇族や將軍家、大名など、位の高い人物に仕える医師の事。

本作品では大名家に限らず、戦国武將の家に仕える

医師の事を指す。

江戸時代からは御典医とも呼ばれる。

前ノ口上

今日、世界遺産としてその姿を残す姫路城は江戸時代になって天守閣が作られ、天下の名城と呼ばれるようになる以前は群雄割拠の時代では戦う為に必要な機能を備えた、丘の上に造られた要塞であった。

姫路城を所有したのは、戦国の大名小寺氏こでらであったが、実際にこの地にあつた砦を姫路城として作つたのは、小寺氏の重臣黒田職隆くろたもとたかであり、その子、黒田官兵衛くろたがんべえは後に豊臣秀吉に仕え、関ヶ原の戦いを戦い抜き筑前五十二万石の大大名として名を馳せた。

一ノ段

序

姫路城の天守閣に長壁なる妖姫が住む事を。

「其身は人間のごとく、八百疋ひきのけんぞくをつかひ、

世間の眉毛をおもふままに読て、人をなぶる事自由なり」

『西鶴諸国ばなし』より

今の姫路城の天守にあたる奥の曲輪で、町ノ坪弾四朗なる侍が家宝の皿を口に啜え横死したのは、永禄7年（1564年）の八月、蝉も鳴き声をとくに潜めた夜半過ぎであった。

「さて」

町ノ坪の死体を目にして、そう呟いたのはこの姫路城を守る黒田職隆の長子にして清廉潔白の青年武士黒田官兵衛。その側で白粉で化粧し女装した、珍妙な様相のまま立ち竦むのは官兵衛の幼馴染であり、目付け役として従者を勤める八代又助。

天井に蜘蛛の巣を無数に作るこの奥の曲輪まがわで、二人が如何にして町ノ坪の怪奇なる死に様と相対したか、それにはこういった経緯がある。

この日の暮れ時、播磨灘はりまなだでの舟遊びを終えた二人は、姫路城に帰る道筋である噂を話していた。それは姫路城の奥の一曲輪おさかへひめに住み、そこで一夜を明かした者を祟り殺すと言われる長壁姫おさかへひめなる妖怪の噂で、この時、道中で会った町ノ坪がこれを聞きつけた。

町ノ坪という武士は、黒田家の主家小寺の家臣であつたが、さる理由から姫路城に逗留しており、その閑暇を持て余した拳句、酔狂者であつた彼は、この話を聞いて即座に自身の武勇を示すという名目で、奥の曲輪に泊まるという肝試しを行った。

町ノ坪の常日頃からの酔狂ぶりに、いささかの不満を抱えていた官兵衛は嫌がる又助を説き伏せて、黒田家所蔵の豪華な打掛うちかけを纏わせ、女中連中に命じて化粧をさせると彼を長壁姫と仕立て上げ、深夜に奥の曲輪に行き町ノ坪を驚かそうという算段を整えた。

「その結果がこれだよ。なんてこつた」

町ノ坪の死体が城の衛士によつて簀巻きにされ運ばれている頃、化粧を解いた又助が嘆息を漏らした。

「なあ又助、俺らが町ノ坪の旦那の死体を発見した時、周囲に人は居たか？ 隠れられるような所は？」

「いや居ない。私達が一本道の廊下を通つて、奥の曲輪の部屋に入るまで誰一人として擦れ違わなかつたし、また隠れられるような場所は無い」

官兵衛がこういつた事を気にしたのは、町ノ坪の異様な死に方が気にかかつた為であり、この戦国の時代にはままありうる、乱波スバイなどの間諜による暗殺を危惧しての事だつた。

「だが、まさか本当に長壁姫の祟りなんて物があるなんて……」

しかし又助は官兵衛の思惑を外れ、町ノ坪の死の原因が長壁姫による不可思議な物だとばかり信じていた。その又助の様子に、戦国時代特有の合理主義を備えた官兵衛は落胆し、自身の考えを示す。

「祟りだつてんなら、そりゃ等閑シンプルだぜ。でもよ、俺らは町ノ坪の旦那

那を驚かす頃合を見計らつて、奥の曲輪に一番近い詰所に隠れてた
だろ。そこで何人か、この奥の曲輪に人が行き来してたのを見たは
ずだ」

「確かに、小姓や女中なんか数人出入りしていたな」

「でだ、その最後に女中が一人と小姓が一人、連れ立つてここを出
てつたのを見て、この部屋に旦那以外に誰も居なくなるのを確認し
て、俺らは一本道の廊下を通つていき、結果として旦那の異様な死
に様を発見したという訳だ。これがどういう意味だか解るか？」

「解らないな」

「口に皿をぶち込んで死ぬなんざ、並みの死に様じゃねえ。自然勝
手に死んでそうなるもんじゃない。なら誰かが、それこそ乱波かな
んかが殺したつて事だ。それは女中と小姓がこの部屋を去つてから
俺らがこの部屋に来るまでの、ごくごく短い合間に事を為遂げられ
たつて話さ」

又助は官兵衛の話聞いて、ううむと唸つて顔を伏せ思索を始め
ていた。又助は生真面目な性格で、何事もひたすら思索すれば答え
が出ると思ひつて性質であるが、合理的な判断を下せず、一方、官兵
衛は合理的な反面、思考を苦手とし事実の考察などは人任せにする
事が多い。

「禰子ー、いるかー」

しかしそこは適材適所、そういつた二人を補うように、いつも二
人の側に控える女性が居た。

「呼んだ？」

官兵衛に呼ばれて、黒田職隆の侍女である禰子は何処からともな
く現れると武家に仕える子女にしては短いかむる髪を揺らして、官
兵衛と又助の間に入った。彼女は生来の嗜好が高じてか、家中や
近隣諸国の物事に明るく、とかく情報を仕入れるのが上手かった。

そういつた点を買われて、姫路城下の商家の娘であるにも関わらず、城主職隆付きの侍女として姫路城に入り、幼い頃から官兵衛達と同等に付き合ってきた、気の知れた仲であった。

「官ちゃんも又ちゃんも、大変だったねー」

「まあそりゃいい。それより禰子、この部屋で町ノ坪の旦那に会った小姓と女中、全員調べられるか？」

「それくらいお易い御用なのよー」

言いが早いか、既に禰子は立って駆け、官兵衛と又助の前から姿を消していた。

「あの調子じゃ、禰子もいずれは乱波になれるな」

「さてな、親父はもうそのつもりで側に置いてるみたいだぜ」

「マジか……」

黒田家の誇る女乱波、禰子の足音は既に聞こえてこない。

二ノ段

既に遠くから朝日が昇ろうという頃、黒田官兵衛と八代又助の二人は未だに長壁姫不在の奥の曲輪を探っていた。

「しかし、ここはあまり使われていないようだな」

疲労のために不注意となったのか、近くの水桶に足を取られて倒れそうになった又助が、恥ずかしさを紛らわせるように言った。

「だろうな、奥の曲輪つてのはようは城が攻められた時の最後の砦さ。堅固に作つてあるが、普段から使うような物じゃない。無用心ちゃ無用心だが、見ろよ、ここなんか半ば物置だぜ」

官兵衛が指し示した通り、長持や葛籠の類が積み重ね荷物が押し込まれている感じをさせる。さらに、調度のいずれもが埃をかぶり、溜め置くべき用心水の桶の中も大分減っているのを見て、勘の悪い又助でも、この部屋が今日までほとんど使われていない事が解った。

「それで又助、外の様子はどうだったよ？」

「どうにもだな、廊下は真っ直ぐこの部屋に続いているし、外の渡り廊下も同様だ。途中に渡り廊下と廊下を隔てる扉が一つ、内からも外からも開けられるようだが、まあ意味は無いだらう。さらに、周囲には堀があるから余程の乱波で無い限り渡ってこれん」

聞きながら官兵衛は、自身の背より少しばかり高い位置にある、嵌め殺しの窓の木枠に手をかけていた。

「こつちの窓も、細工したような形跡は無いな。となれば、暗殺の手段は一つ、食べ物か飲み物に毒を仕込んで含ませる事だ」
「確かに、ここに入入りした人間で何人かは食事か酒を運んでいたな」

ここで猫の鳴き声のような物が聞こえ、それに気づいた官兵衛が手を叩くと、やはり何処からか禰子が姿を現した。

「禰子か、どうだった？」

「パパつと調べてきたよ」

「誰が町ノ坪氏に会っていたか、解ったか？」

禰子が小さく右手の指を一本ずつ折り、薬指まで行った所で止め、顔を上げた。

「四人だったよ。小姓さんが二人、女中の方が二人」

「やはりか」

官兵衛と又助が詰所から奥の曲輪突入の頃合を見計らっていた時、町ノ坪の所には合計で四人の人間が出入りしていた事を、二人とも記憶している。それらと合致したという事は、他に侵入者が居ないという事である。

「えつと、会った順番で言った方が解りやすいよね？」

「頼む。それと、何か食事か酒でも持ち込んだ者が居たら言ってくれ」

「了解。まず小姓の新右衛門君が、最初に会いに行つたみたい。これはただ話しに行つたんだって。次に女中のお吉さん、夕食を運んで行つたんだってさ。その次が小姓の菊千代君、お酒を持っていったんだって。最後に女中のお蝶さん、この人もお酒を持っていったみたいだよ」

その報告に、腕を組んで聞いていた又助は深く頷いた後、何かを思い起こしたのか、顔を上げて禰子を見据える。

「ふむ、私と官兵衛がここに踏み入った時、部屋には誰も居なかった、それは事実だ。そして昨日、この部屋にはその四人の人間だけが出入りしたという事になるな」

「それってつまり？」

禰子が事実には思い至ってない事に、又助は少しばかりの優越感を感じ、得意げな顔になる。

「検分の結果、外からの出入りは難しいという事になった。だから、その四人は現状では町ノ坪殺しの容疑者という事になる」

「おお、なるほど」

禰子は感嘆しながらも、既に又助でなく、適当に調度品をいじっている官兵衛の方を向いている。

「だつてさ、官ちゃん」

「それで、又助が気になつてるのは、その中で毒を仕込んだ人間が居るか、居るとしたら、一体いつ毒を仕込んだか、だろ？」

「ああ、夕食一回と酒二回、そのいずれかに毒が仕込まれていた、と考えるべきか」

「だが待てよ又助、町ノ坪の旦那は一応は客将だったんだ。当然だろうが、食事の時は側の者が毒見を行うだろ？」

「そうなるな」

「つて事は、小姓か女中が毒見を行ったとして、町ノ坪だけが死ぬつてのはおかしいだろ」

「いやいや、犯人だけが解毒剤を持っていたのかもしれない」

「なるほど、遅効性の毒ならありだが毒の種別が解らない今、それを考えるのは禁物だぜ」

「待てよ、それなら動機から推理したらどうだ。その四人の中に町ノ坪に恨みを持つ者が居るのかどうか」

「それも無しだ。もしもどっかの間諜なら、スパイ動機なんて関係なく殺してるぜ」

侃々諤々の論争中、かんかんがくがく禰子だけが一人冷静に事実の取捨選択を済ませていた。

「毒の種類が解らないなら侍医の先生に、動機が解らないなら職隆様に聞けば？」

「それだ！」

二人の和声が響いた所で、日が登り、何処かで鶏が鳴いた。

三ノ段

奥の曲輪を抜けた先、左右を土塀に挟まれた道を二人の青年武士と、一人の少女が歩いている。

「ねえねえ、そついえばなんで二人は事件を調べてるの？」

禰子のあつけらかんとした言葉に、黒田官兵衛と八代又助の二人は一度顔を見合わせてから

「放っておいたら、黒田の家がヤバイ」

と、同様の事を言った。

思索少なき官兵衛も、勘鈍き又助もこの事件が、黒田の家に与える影響を十分に理解していた。まず第一に、主家の小寺家の客将である町ノ坪がどのような形であれ、黒田の居城で不可解な死を遂げれば、謀反の気があると小寺に疑われかねない。次いで、乱波が城内に潜んでいるとなれば事態はさらに深刻で、謀略に利用されるか場合によっては寝首をかかれる可能性すらある。

「ふうん、やつぱり二人つてちゃんと戦国武将やつてんじゃない」

気楽な禰子の物言いを受けて、それぞれ簡単な軽口で返した後、事件の思索を一旦打ち捨てた二人は、当主である黒田職隆へ報告しに行く事とした。禰子とはここで別れ、その去り際に官兵衛は、引き続き事件の情報を集めるようにと言い含めていた。

さて、この職隆も己が子と変わらず、十分に合理的な思考をする武士であるが、それ以上に主家に対する忠義というのも持ち合わせしており、主家である小寺から客将として招いていた町ノ坪が、自身の管理している城で死んだという事実^{じじつ}に苦慮^{くろ}していた。

「親父殿、町ノ坪の旦那の事で何か解つたかい？」

居館の奥の当主の間に二人が通された時も、職隆は悩ましげに眉をひそめていた。

「まだだね、侍医の蓬萊庵先生にも診て貰ってるけど、まあ暗殺だとは思うよ」

「御当主、何か確証^{かくじょう}が{o}ありのようですが」

又助の問いに対し、職隆は手頃な高杯^{たかつき}に盛られた貝の乾物^{かわきもの}を手に取り、口^{くち}に抛^{ほう}つてから平静の調子で言葉を返す。

「町ノ坪殿はネ、小寺の家の方で揉め事を起こしたというか、どうにも疎まれててね。小寺の本城^{しんじょう}の御着城^{ごちやくじょう}じゃなくて、姫路に逗留^{とゆうりゅう}してたのもそういう理由^{りゆう}があつた訳さ。でもまあ、殺される理由^{りゆう}が無い訳^{わけ}じゃないけど……」

そこで言いよどみ、深くまなじりを結んで開く気配の無い当主に向かい、又助が先を促した。それを受けて、難しい表情で職隆が口を開いた。

「町ノ坪殿、皿を啜えながら死んでたんだって？」

「そうだったな、こつがうちりと三十糶センチはあるつかという大皿を歯で噛み締めてだ、あまりの形相で長くは見たくは無かったが、歯茎から垂れた血が皿に糸すじを描く程だ」

口元に手を添えて、皿を噛む様子をしてみせた官兵衛を見て、職隆はさらに怪訝な表情を作る。

「なるほど、ならこれは“見立て”だ。四十年前の皿屋敷事件ひらやしきじけんのネ」
職隆は眩き、口中の乾物を咀嚼そじぎくした。

四ノ段

町ノ坪弾四朗が怪死を遂げてより六刻はんにちを数え、中天に日高き昼の事である。

姫路城を最も外側で取り囲む一の曲輪の外、姫路の町へと続く道を黒田官兵衛は歩いてきた。照り付ける日は地面を焼き、土埃立たぬ道は、薄く陽炎を作る。道の端に広がる松並木からは、蝉の鳴き声と、遠くから吹く潮風が交差して訪れる。

「じゃあ、その皿屋敷事件ってのは小寺の当主の暗殺未遂だったのか？」

官兵衛の言葉に答えるのは、老翁ながらに意気盛んな黒田家の侍医、津田蓬萊庵である。

黒田職隆が意味深に呟いた、皿屋敷事件なる物を誰彼かに詳しく聞こうと思っていた官兵衛は折り良く死体の検分を終えて帰る途中のこの老翁に出会い、その後を着いて歩く最中であつた。

「正確には暗殺未遂と、その後の皿屋敷事件で一括りにされとるんだがな。事件は、ここ姫路城に小寺の前当主小寺則職のりもく様が居った頃の話でな。お前さんは当然まだ生まれて無いし、親父さんも姫路の城代になる前だな」

老翁の昔語りが、ごく自然に始まるのを良しとして、官兵衛は蓬萊庵に言葉の先を促した。

「小寺の家老だった青山あおやまてつひん鉄山という男が、密かに謀反を企てておつたよ。それに気づいた衣笠きぬがさ元信もとのぶという家臣が、ああ、ほれ、今も衣笠家の若い者が小寺の所に居るじゃろ」

「ああ、久右衛門きゆうゑもんが、一度会った事があるな」

ここで名を上げられた衣笠久右衛門は後に官兵衛に仕え、黒田家中で優れた二十四の勇士として黒田二十四騎と呼ばれるまでになるが、ここでは措いておく。

「それで、その衣笠元信という家臣が、自身の愛妾だかを女中として青山の元に忍び込ませ、情報を探らせておつたそう。そのお陰で、青山が花見の席で則職様に仕込んだ毒酒を見抜き、事なきを得た。しかし兵を伏しておつた青山に追われ、小寺の者は姫路の城を明け渡す他なく逃げ遂せるのでやつとよ。その結果、青山の下に残された衣笠の女中も、厳しく取り調べる事となった。この時、青山の家臣であつたまだ若き町ノ坪弾四郎は、その女中に恋慕したのよ。町ノ坪は罪を許す代わりに、自身の妾となれと迫つたが、女中はそれを断つた」

蓬萊庵が話している合間に一度道を折れ、武家屋敷の集まった区画へと入るのを見て、官兵衛もそれに続く。

「それで、町ノ坪はその女中をどうしたんだよ」

「殺してしもうた」

短く切つて、官兵衛を残し蓬萊庵は武家屋敷の群れから少し離れた、寂しげな路地へと入っていく。その向こうに蓬萊庵が結ぶ、施せ薬やくの為の庵があるのだ。ここは黒田家中の人間にも、姫路城下の町人にも開かれた場所で、その丁度中間に位置している。

「殺した、ってやっぱり俺の気持ち解らぬのならー、ってヤツか？」

「だとは思つよ。ただその女中の最期が悲惨だった。青山家の家宝である十枚一組の“毒消しの皿”、この一枚を町ノ坪が隠した。皿の管理を命じられていた当の女中は、町ノ坪から皿を紛失したとして厳しく叱責され、木に吊るされては棒で叩かれ、しまいには井戸に投げ入れられ、殺された訳さ」

「無実の罪で殺された、って事か。なるほど、そりゃあ酷い話だ」
「でもって、青山の屋敷の井戸から、夜な夜な皿を数える声が聞こえる。一枚、二枚、三枚、ってな。それがどうしても九枚目で途絶えて、哀しそうに泣き始める。これをもって人はその女中の亡霊としてよ、青山の屋敷はいつしか皿屋敷と呼ばれたそうな」
「はあん、なるほど真夏の怪談だな」

庵に到着した蓬萊庵が、既に関け放つていた土間へと入り込むと、官兵衛には構わず勝手に腰を下ろす。

「ちなみにこの儂の庵が、その皿屋敷があつた場所だ」

官兵衛が吹くのを見越してか、手頃な帳簿で顔面に迫る官兵衛の唾を防いだ蓬萊庵。

「おいおい、そんなオチはいらないんだよ！」

「まあそう言うな、オチというなら、この庵の後ろに例の女中が投げ入れられた井戸ってのがあるぞ。興味があつたら見に行つてみる」

官兵衛はちらと庵の背後に目をやるが、すぐさま蓬萊庵の顔を覗き込んでから、庵の中へと上がつて行く。蓬萊庵も勝手知りたる仲であるのか、手頃な所に座布団を投げてよこし、自身は早々に庵の

少し奥へと入る。

「ところで爺さん、俺が他に聞きたい事も解ってるんだろ。町ノ坪が毒で殺されたかどうか、殺されたならなんの毒か、教えてくれよ」

ふん、と小さく鼻を鳴らしたかと思うと、蓬萊庵は庵の奥から小さな袋を持ち出して現れ、その中から懐紙に包まれた物を取り出し、二人の間にある黒机の上に広げる。すると、そこから角ばった黒光りする小さな粒が転がり出た。

「なんだこりゃあ」

「石見銀山だよ」

「ああ？」

「こつから近い石見国いわみにある銀山だ、それは知ってたんだろ？ これはその辺りの鉱山で取れる、砒石びせきって名前の鉱物を砕いた物で成分的には、毒物のヒ素みたいなモンだ。この辺じゃあ、これを石見銀山って呼んで殺鼠剤として使ってる、有名な物だよ。奴さんやつこの状況から見て、これの中毒で死んだ人間に良く似てたぜ」

「って事はあれか」

「そつだ、恐らくこれがあの町ノ坪を殺した毒だろう。砒石は毒性が強くてな、人間様でも飲めばすぐさまコロリだ」

「すぐさまコロリ、って事は遅効性の毒じゃないんだな？」

「ん、ああ、その通りだ、毒見の段階で砒石が紛れていたら毒見役が即座に苦しみだして死ぬだろうよ。その場合は町ノ坪が毒をかつ喰らう事は無い」

腕を組んで蓬萊翁は深く頷く。その様子に納得して、官兵衛は次の疑問を投げかける。

「じゃあ後は何に毒を盛ったか、だな。毒の正体が解ったんなら、

そっちは見つかったるんだろ？」

「見つかったらん」

官兵衛の鋭角な質問に、目の前の老人は小さく縮まってしまった。

「見つかってないってなんだよ、その辺のネズミにあの日の料理でも食わせれば解るだろ？」

「解る、それは確かに解る。だが、あの場にあつたどんな食べ物を食べさせても、アイツらの薄汚い腹が膨れるばかりで、一向にちうと一鳴きして死にやあせん」

蓬萊翁は唇をネズミのように窄^{すぼ}ませて鳴き真似をし、出来る限りの可愛い仕草を取る。その様子を無下に見据え、官兵衛は尖ったたまの質問を続ける。

「それはつまり、どの食べ物にも毒は含まれてなかったと？ ちやんと探したのかあ？」

「膳の上の料理も駄目！ 瓶の中の酒も駄目！ 水瓶の中の飲み水も駄目！ およそ人が口にする物は全て調べてみたが、どれもネズミ一匹殺せんかったよ」

矢継ぎ早の口調は、最後の方で調子を落とす、自信なさげな物へと変わっていった。

「ふうん、それも妙な話だな。毒の検討もついでるし、毒死も間違いない。なのに何時、何処で、誰が、何に毒を仕込んだのか、それが一つも解らねえ」

ここで官兵衛は言葉に詰まり、苦手な思考の渦に吞まれていく。

その思考がどうにも取りとめの無い事を自覚して、官兵衛はやにわに立ち上がると、後ろからかかる蓬萊庵の声に、ただ一言じゃあな、とだけ返して外へと駆け出した。

又助と彌子は今、官兵衛から離れて町ノ坪と会ったという小姓と女中に聞き込みを行っている。その為、どうしてもなんらかの答えを自身で見つけねばならず自然と官兵衛の足取りは不確かな物へと変わっていった。

そこでようやくと、自身が道を外れいつの間にか高い木々に囲われた茂みに入った事に気づいた官兵衛は道を戻ろうとして目の端を、何か黒い衣切れが飛ぶのを見た。官兵衛は、その黒い衣切れの正体を確かめようと、小さく頭を振った。

それは一匹の蝶である。

黒地に白の筋を透かしたような羽を、ひらひらと羽ばたかせて何処かへと飛んでいく。官兵衛はその蝶が飛ぶ先に、何かしらがあのような気を起こし、庵の裏手へと飛ぶ蝶を追う。

それより少し歩き、庵から二十米程離れた辺りで官兵衛は蝶を見失い、辿りついたそこは、人によって手入れがなされず、雑然と草木が茂る陰鬱な神社であった。

「なんで、こんな所に……」

それは木々の中に埋もれるように佇む、小さな社で周囲の草木には人の手が入った様子は無いが、真新しい花が供せられていた。

「そこは十二所神社ですよ」

突如かけられた背後からの艶やかな声音に、思わず官兵衛は身を硬くする。それを気にも留めずに声の主は、官兵衛の横を通り抜けると小さな社の方へと進んでいく。

「つと、アンタは……」

官兵衛の目に、薄緑の紬ちゆうを着た妙齡めうれいの女性の背が映り、その手には少量の水を張った桶と、どこかから摘んできた花が携えられているのが解った。

「私は、その神社の掃除などをしている者です」

「へえ、誰も知らないような神社だと思ったがな。一体どんな神社なんだい？」

「祭神は少彦名神様すくなひこなのかみです。医薬の神様で、かつてこの近辺で流行り病が起こった折、ここに十二本の蓬よもぎが生え、これによって病を防ぐ事ができたという由来があります」

「ああ、だから爺さんはこの真ん前で蓬菜庵なんてのを作ってたのか」

官兵衛の言葉から、官兵衛が地元の間人である事を察したのか、女性は今までの冷たい表情から

少しばかり柔らかい表情へと移り変わる。

「蓬菜先生には、私も良くお世話になっております」

女性は手桶から水を柄杓で汲み、神社の近くの地面へと撒いている。時折、結わえた長い髪が頬にかかる、そのたおやかな仕草を、官兵衛は見守っていた。

だが官兵衛の視界から逃げるように、女性は木々の生い茂る道の方へと進んでいく。官兵衛は先ごろ見失った蝶を再び追うように、

女性の後を追うが、それが自らの意の外である事は、既に彼は気づいていない。

やがて日差しを覆い隠す程に鬱蒼とした場所で女性は立ち止まると、柄杓に水を取る。官兵衛が視線を向こうにやると、木々の途絶えた小さな空間に苔生した石造りの小さい古井戸が見え、女性は掬った水をその縁へと垂れ流し、乾いた石と苔こけに水気を含ませる。

「その井戸……、皿屋敷の女中が投げ入れられたっていう」
「これは……、ただの井戸です」

官兵衛は、女性の黒い髪とほっそりとした後姿に、先ほどの蝶の姿を重ね合わせていた。女性は緩やかに振り向くと、官兵衛へ優しいな笑みを見せる。それと同時に木立に吹き込む風によって、官兵衛の鼻にジャコウの嚏むせるような匂いがつく。それは女性がつけていた香料であった。

「ただの、井戸です……」

意図せずに井戸の中を覗いた官兵衛は、そこが何よりも黒い穴であるのを見て、井戸がとてつもなく深い物だと感じた。

「深いな……」

呟いた官兵衛は思わず後退りし、再び目の端に黒い衣切れが飛ぶのを見た。

五ノ段

中天にかかろうとする日差しが、東側の障子を透いて女中部屋に漏れる。

「うひゃあ！」

これは青年武士八代又助が、少女乱波禰子に脇腹を小突かれてあげた悲鳴である。

黒田官兵衛が侍医津田蓬萊庵に従い、皿屋敷の怪異と、毒物の正体を尋ね聞こうとしていた頃、姫路城の居館では、又助と禰子の二人が、前日に怪死した町ノ坪弾四朗と会ったという二人の小姓と二人の女中から話を聞こうとしていた。

「黙ってないで、又ちゃんも何か聞いてよ」

「いや、私は考えていてだな……、それになんとか落ち着かなくて……」

又助達の居る部屋は普段から女中達の詰所として使われ、甘いジャコウの香りに満たされており匂いだけで感覚を麻痺させる物があった。

そのような中、所在無さげに^{まぶた}瞼を開閉する又助と眼前で対峙するのは、女中長を務めるお吉。さらにお吉の背後、先程から落ち着き無く顔を伏せ、視線を逸らし、足元を小刻みに動かしている女性が新参の女中お蝶であり、その隣で^{せいかん}精悍な顔つきで微動だにせず控えるのが小姓新右衛門。変わってお吉の隣にいくらか^{こわろ}憔悴した様子で、虚ろな目を見せるのが小姓の菊千代。これら四人が、町ノ坪に会っ

た人物であり、目下の容疑者であるのだ。

そればかりか、お吉の背後で薄く開かれた襖の向こうには手を休めた女中達が詰めかけ、好男子と噂の又助を見ようと何度も襖の傍を行き来しては、ちらちらと覗き見、その都度薄く微笑みかけ、手を振り、頬を赤らめる。この状況では、さすがの又助も居心地悪さを感じずにはいられない。

「八代様、申し訳ありませんね、こんな女性ばかりの所で話させて貰いまして」

「別に良いって、お吉さん。又ちゃんは、もうちょっと女の子に慣れた方がいんだよ」

「襦子、黙ってらっしゃい」

「はい」

この調子で襦子の又助への助け舟は、ことごとくお吉に沈められている。せめて襦子が話に入ってくれば、と又助は苦い顔をするも、このままでは埒が開かないので、意を決して襦子と打ち合わせていた通りの事を聞き出す事とした。

「あの……」

言いかけた又助の言葉に反応して、容疑者達は四者四様に反応を示す。

「あの……、お吉さんは昨夜、町ノ坪殿の所へ行かれたのですよね」「そうです、襦子には簡単に話しましたが、もう少し詳しくお話しましょうか？」

その中でお吉は、数居る女中達を束ねるだけの事はあり、黒田家

の女性の中でも、世情に詳しい。それ故に、又助がこうして町ノ坪の死について聞きに来た時既に、その死がただの怪談話で済ませられる物でなく、主家の存亡に関わる事件だと気付いていた。

「昨夜、私は夕食を町ノ坪様の元へお運びしました。恐らく八代様が聞きたいであろう事を申しますれば、料理を運んだ時は、目の前の料理にだけ注視しておりましたので、それに何者かが近づいたという事はありません。その後は、町ノ坪様がお召し上がりになる前に、一通りの料理を毒見致しました」

「毒見役は居なかつたのですか？」

「小姓の新右衛門様が町ノ坪様の傍に居られ、共に毒見を致しました」

「然り、拙者、お吉殿と共に町ノ坪様の毒見役を勤めもつした」

型に嵌めたような武士言葉で返答する新右衛門は、どこか又助の心を緊張させる。

「その時は異変なく、僭越ながら町ノ坪様よりお酒を一献頂きまして、後は奥の曲輪を去りました。この時、外から小姓の菊千代様がお越しになられ、新右衛門様もお帰りになるとの事で、二人で奥の曲輪を立ち去りました」

そこまで聞いて、一度頷いた又助は先程より一層生気の無い菊千代の方を注視した。

この菊千代という小姓、やはりどうしても、並の女性よりも美しいと評判で、現在もその悩ましげな表情すら、倣う事無き西施の鬢、絶世の美女のそれと見受けられる。

「……何か？」

やがて又助の視線に気づいた菊千代が、そういつた表情のまま静かに口を開く。返された又助の方は逆に顔を赤くし言葉に詰まり、話の先を促す事を諦めてしまった。

「又ちゃんつて、女の子も弱いけど、美少年にも弱いんだにゃあ」
「い、言うな！ あ、ああ、ええと、じゃあちよつと菊千代君は後にして、次に奥の曲輪に行った、お蝶さんですか。お話を聞かせてください」

お蝶はその言葉に大きく身を仰け反らせたかと思うと、次いで畳に擦り付ける程、深く頭を下げた。

「わ、私は予め町ノ坪様に言われた通り、夜も更けた辺りにお酒を持っていきました。それだけで、後は何も……」

このお蝶というのは、後にお吉から詳しく又助達に伝えられるが姫路より少し離れた英^{あが}賀という所の出身であり、ごく最近になって家族を養う為に黒田家に女中奉公として、召抱えられたのだという。そういう経緯もあってか、姫路出身の者で占められた女中達の間ではその存在が浮き、肩身の狭い思いをしていた所、例の怪死事件に関係してしまった。

これでは今、又助の前で身震いして目も合わせられないでいるのも仕方の無い事である。

「町ノ坪殿は料理や酒には手をつけていましたか？ 部屋には他に誰かいましたか？」

「り、料理には、一通り手をつけていらっしやいました。お酒が空になっていましたので、私が運んだ物を新たに注ぎました。その時は、小姓の菊千代さんも既に居ましたので、お吉さんと同じように

私と菊千代さんの二人で、料理とお酒の毒見を行いました。その後
は菊千代さんが帰ってしまったので、交代で私が町ノ坪様へのお酌
を務めました」

「何か、他に変わった事はありませんか？」

「いえ……、他はその……、言い難い事ですが、町ノ坪様に体を触
られたくらいで……。こ、これは構いません、常の事でしたから。
後は確か……」

お蝶はそこまで言って、昨夜の事を思い出しているのか、眉をし
かめ、唇を結び、不安そうな顔からより一層の、悲愴な物になつて
いく。

「“毒消しの皿”ですか、あれをしきりに自慢なさっております」

「ああ、あの町ノ坪殿の家宝とかいう」

「はい……、とても貴重な舶来の焼き物であるとか、毒を盛られて
も、これで水を含めば安心なのだ……」

「結局、それでも死んじゃったんだけどねー」

「禰子！」

禰子の軽口をお吉が厳しく咎める。小さく舌を出して身を竦める
だけの禰子であるが、隣に居たお蝶の方が禰子以上に身を強張らせ
る。その様子に仕様が無く、又助が話しの先を促す。

「んっん、まあまあ、ええと……、後はそうだな。ああ、確か貴女
が奥の曲輪から出てきた頃、桜色の着物の小姓が向かって、一緒に
出て来ましたね」

すると又助のその言葉に、不安そうだったお蝶の表情が多少和ら
ぐ。

「あ、それは……、菊千代さんです。町ノ坪様に伝え忘れた用件があるとの事で、私が去る頃に外で会ったんです。私はその時……、菊千代さんから一緒に帰ろう、と言われて、外へ出た所で待っていました」

ここで再び又助から視線を送られた菊千代は、表情の変わらないものの、いくらかの生気を取り戻した上で、頭を縦に振る事によって同意を示した。

「菊千代君、君はどれくらい町ノ坪氏の所にいましたか？」

「少し、だけ」

それでも未だ言葉がぎこちないのは、菊千代にとって常の事なのか、そう考えて又助は視線をお蝶の方へと返し、彼女の言葉を待った。

「居た、という程でもありません。私が居た所からお二人が見えましたが、菊千代さんは部屋の入り口に出た町ノ坪様に二言三言告げて、すぐに私の方へ来ましたし、町ノ坪様もすぐに部屋の中へ入っていききました」

「なんと言っただんですか？」

又助のこの言葉に、菊千代はやおら唇を噛み締めながら答えた。

「火の元に注意して下さいとだけ。用心水が、尽きていますので、と」

「なるほど。なら、君はすぐに町ノ坪氏の所から……」

又助がそこまで言った所で、彼だけでなく禰子も、この場に居た容疑者も、さらには襖の向こうで様子を伺う他の女中らも、一様に

ぎよつとした。

それは先程まで平静を保っていた菊千代が、はらはらと泣き出したかと思うや、終には町ノ坪様と、名を呼んで号泣しだした為であった。

このたおやかな小姓の心中に、町ノ坪彈四郎に対する如何程の思いがあつたのか、泣き崩れたままお蝶に付き添われ部屋を出る菊千代に、又助と禰子は異様な罪悪感すら覚えた。

六ノ段

「それで結局、詳しい所までは聞けず終いつてかア？」

姫路城に響かす音を寂しげな蜩ひぐさに転調した夕刻。奥の曲輪で黒田官兵衛は手持ち無沙汰ながもちに長持いじを弄くりながら、八代又助に落胆の念を込めて問いかけた。

「そういう官ちゃんはどうなの？ 何か解った？」

葛籠くわろうに座つて足をばたつかせながら尋ねたのは、禰子である。

「一応、毒の種類つてのが解った。爺さんはヒ素みたいなモンつつてて、もし含めばすぐさま苦しんで死ぬつて言つてたぜ」

「そうだとしたら、あまりにも解せない。何故なら、お蝶さんと菊千代君が最後に町ノ坪氏に会つてから、私と官兵衛がここに来るまでの間、この奥の曲輪には誰一人として近づいていないんだ。町ノ坪氏を殺害するには、その前に何処かで毒を含ませ、それをどうにか誤魔化すしかない」

そう返す又助に、禰子が横槍を入れる。

「でもさ、皆が皆一度は毒見をしたんでしょ？ 何処かで入つてたら、誰か死んじゃつてるつて」

「ふむ、ならば最後に来たお蝶さんが犯人だというのは？ 自分が毒見をした後に、隙を見て酒に毒を仕込む。これなら被害が出ないはずだ」

「でーもー、菊千代君はその後に町ノ坪のオジサンに会いに行ってるんだよ？」

「そ、それは彼にも協力して貰うとかで……。ぐむう、無理か」

「推論でお蝶さんの事悪く言うの駄目だよ、又ちゃん。だからモテないんだ」

又助の言葉を聞いて、官兵衛もまた何かに気づいたのか禰子の方に向き直る。

「実際どうなんだ？ そのお蝶つてのと、菊千代の間柄は。話を聞く限りじゃ、仲は悪くない、むしろ良い方だとは思うんだが」

「うん、私も色々聞いてみたけど、結構仲が良いみたいだよ。郷里が違って馴染めないお蝶さんに、菊千代君が優しくしてあげてたんだつて。昨日もそうだったみたいだけど、仕事の時とかに一緒にお使いに行ったり、菊千代君が貰った綺麗なお菓子を、お蝶さんに分けてあげてたりとか」

短く唸って黙り込む官兵衛とは逆に、その言葉を聞いて息巻いたのは又助であった。

「ならばそうだ！ お蝶さんと菊千代君は二人が共犯で、どちらかが毒殺したものを口裏を合わせているんだとしたら。あ、いや、さらにお吉さんが犯人だとしても、お蝶さんと菊千代君がそれに同調すれば、あ、いやいや、それには新右衛門君も口裏を合わせない！」

「又ちゃん暴走気味だねー。でも、見た限り全員で口裏を合わせるようには見えなかったよ」

禰子の相次ぐ反論に、ついには又助の思考も底を尽いたか、頭を掻き毟むしって腕を組むと、だんまりを決め込んでしまった。

その様子に呆れたのかどうなのか、官兵衛は何かを思い出したように懐を探ると

小さな包みを取り出して又助に手渡した。

「なんだこれは？」

「爺さんの所から帰る時にな。坊ちゃんのお守りと元氣娘の世話で氣苦労の絶えない又助に渡してやれってよ。胃薬だ」

ぴたりと眞実を押し量られた又助は、恥ずかしさから唇をきつと結んで半眼で坊ちゃん官兵衛を睨んでから、薬を奪うように受け取って包みを開く。開いた紙の中央に一つの大きな丸薬が現れると、元氣娘禰子がそれに大いに注目した。

「何これー、なんか彫ってあるよ？」

黒い丸薬に光の加減で、細かい溝の陰影が見え、それはちょうど「蓬」という文字を崩したものが彫られているという事が解る。

「ああ、それは爺さんの癖だよ。自分の薬には全部作った自分の印を彫るんだとさ。最近じゃ小さな粒薬にびっちり彫る為に、良く解らない達人みたいな技まで会得しやがってた」

官兵衛の説明の合間、余程疲れていたのか頭が回っていないかったのか、又助は一糲ほどのその薬を、口中に滑らせるとそのまま喉の方へ押し込む。それが喉仏の裏あたりで引っかかり止まるのと同時に、又助の身体の動きも止まる。

「又ちゃん、苦しそうだけど？　どうかした？」

縦と横に首を振り、その窮状を伝えようとする又助を見て、官兵

衛は悪いと思いつつも、自らの笑いを抑える事が出来なかった。

「ははは！ 水と一緒に飲むモンだろ！ あの大きさは。あー、水か水、この辺には無いな。お、あの桶の用心水でいいんじゃないか、汚いけど」

必死の形相で首を振って否定する又助であったが、差し迫る苦しみと武士にあるまじき状態に耐えかね、水桶の方へ向かい駆け出す。しかし、思うように進まなかった足が又助の身体を放り、頭の方から水桶へと突っ込んでいく。空の水桶が転がる乾いた音の後、短い悲鳴を上げて又助は奥の曲輪中央に倒れ伏した。

「だ、大丈夫？ 又ちゃん」

「がはっ、かつ、お、今ので飲み込めたぞ」

心配そうに駆け寄る禰子と、気恥ずかしそうに頭を掻く又助とは対照的に直前まで笑い転げていた官兵衛が急に押し黙る。かと思えば、得心した表情を浮かべて、外へ出る廊下に向かって歩き出す。

「なるほど、そういう絵だったか。見えてきたな」

「え、何？ どういう事、官ちゃん」

禰子の疑問に答えるより先に、廊下の外、奥の曲輪と外を繋ぐ中間点に至った官兵衛は、そこで警備している衛兵を見つけると、又助達には聞こえない距離でいくつか尋ねた。

「ええ、そうです、来ておられました。時間は、八代様方が女中部屋で尋問を終えた後です」

鼻の横に黒子ほくろのある、剛毅けういそうな衛兵の言葉を受けて官兵衛は全

てを理解したようだが、答えを聞きあぐねた禰子には、さらに又助にも未だ何の事だか解らなかつた。

「ねえ、官ちゃん。どういう事？」

「ああよ、この奥の曲輪に俺らの他に誰か来たかつて聞いたんだよ。そしたらなるほど、予想通りだ」

「おい、官兵衛。それでなんで予想通りなんだ？」

「まあ待て、おいおい説明はしてやるさ。それよりも二人は俺の頼み事を聞いてくれるか？」

そう言つと官兵衛は、又助と禰子の頭を引き寄せ、自身の計略のいくらかを伝えた。

「ええ？ 何ソレえ、まあ、そういう頼み事くらいなら簡単だけどさ」

「それで向こうが乗ってくれば、皆中さ。さて、又助の方はちよいと俺と一緒に来てくれ。彼女に聞いておきたい事があるんだ」

「彼女？」

官兵衛の説明を受けた二人は、驚いたような表情の後、全てを納得し、それぞれの役目を全うする為に奥の曲輪を離れた。時は既に暮れ方、姫路城の西、京見山きよみみやまと城山しろやまの低い稜線に日が沈んでいく。

七ノ段

「昨日何か渡されたか、ですか？」

廊下の行灯あんどんに火を入れている黒田家の女中お蝶は、一旦手を止めて、そう尋ねた黒田官兵衛と八代又助の方を向いた。暗がりで行灯の火がかかっているからか、お蝶は昼間の頃と変わって血色良く見える。

「あ、そうです、これを頂きました」

そう言い、お蝶は懐から紅白に彩られた包みを取り出すと、官兵衛の方に差し出す。受け取った官兵衛はそれを開くと、仲から綺麗に造作された団子菓子を取り出し、近づけて見てからにやりと笑い、次いで隣の又助にも見せた。

「食べるなよ又助、どうやらこれが本命なようだ」

「あ、あの……、どういう事なのでしょうか」

不安そうに尋ねるお蝶の肩を官兵衛が掴む。それに反応したお蝶の方は身を竦め、余計に不安そうな表情を作った。

「いや、良かった！ 良く食べないでいてくれた！ 君は気のつくコだな！」

官兵衛の感嘆を分不相応な賛辞と受け取ったお蝶は、気恥ずかしそうに頭を何度も振る。

「^{ダイエツト}瘦身中でして……、食べないのも申し訳ないとは思いつつも……」

状況をいまいち飲み込めていない又助の方が、団子菓子を物欲しそうに眺めている。仕方無しに官兵衛はお蝶には聞こえない距離で、口早に又助に事の次第を伝え、それを受けた又助も一度顔をしかめた後は黙ってお蝶の方を見るだけであった。

その後は、他の行灯に火を入れる作業に戻ったお蝶を見送り、官兵衛は禰子の報告を奥の曲輪の近く、昨日に又助と二人で潜んだ詰所で待つ事とした。

「やつほ、官ちゃんに言われた通りに話してきたよ」

詰所の窓の方から顔を覗かせた禰子に仰天する又助を捨て置き、官兵衛は事の次第を尋ねた。

「ちやんと言ったか？」

「うん。『奥の曲輪の水桶を蓬莱庵のお爺ちゃんに持っていく』って言っといた」

「次第は？」

「代わりに私がやっておきます、だつてさ」

「って事は、もう出てる頃か。よし、二人とも、どうやらここが大詰めだ。長壁姫の正体、見に行つてやろうぜ」

八ノ段

蝸は鳴き声を潜め、草陰に虫の鳴き始める宵。前日に黒田官兵衛と八代又助の二人が、肝試しを行った町ノ坪弾四朗の元に長壁姫の女装をして脅かしに行つてより、丸一日を経た。

毒消しの皿なる家宝を口に啜えて怪死した町ノ坪は、いかなる時に毒を盛られ息絶えたのかその事実を追い求めた官兵衛は、今、侍医津田蓬萊庵の庵の前に来ていた。

ひらりと、目の端に黒い蝶のような物が映るのを見て、官兵衛はその先の暗闇をじつと凝視する。

「あら……」

先に声をあげたのは、暗闇に薄緑の輪郭を浮かび上がらせた女性であった。女性は手にしていた水桶を置いて、官兵衛の方に向き直り、その優美な顔を緩ませる。

「こんばんは」

「こんばんは。また神社の方に、いや、井戸の方に来てたのかい」

官兵衛の言葉に女性は反応せず、その作られた笑みを浮かべるだけである。

「さて、ところで警備上の都合でな、君の身分を明かして貰いたい

もんだが。おっと、自分から長壁姫って名乗るならそれでもいいぜ」

その言葉にも答えない女性に対し、官兵衛は左の手を挙げ、それを遠くから見取った又助と禰子が、その背後にお吉、お蝶、新右衛門を連れて現れる。

「嘘……、そんな、貴方が」

そう呟いたのは、口を押さえたお蝶である。容疑者であった後の二人も、同じく驚いている様子だった。

「まあ、その姿つてのはどうにも人を誤魔化すのに役立つらしいな。小姓つて身分なら月代さかやまに髪を剃らなくてもいいし、何よりそんな女性よりも女性らしいんじゃないだろうよ。ええ、菊千代！」

呼ばれた薄緑の袖をまとった菊千代は、一度びっくりと身を震わせた後、体勢を直すと、官兵衛達の正面に立ち、優美な顔をより崩して不敵に笑う。

「ちょっと悪戯が過ぎました、官兵衛様をからかった事は謝ります。でも、以前にここで会った時も、気づいておられなかったものですから、つい」

「そこは言ってくれるなよ。アンタみたいな女が、まさか小姓だとは思わねえさ。ただ、その後の禰子の話を聞いてなるほど、アンタが犯人だとはきっちり気づいたぜ」

官兵衛は一步踏み込んで菊千代に近づくと、背後の又助らにも聞こえる大きな声で

「さあ、アンタの策略、解いてやろうか！」
そう口上を上げた。

「アンタは今日、又助達の尋問の時、泣き腫らして退場したそうじやないか。アンタはそのままの足で奥の曲輪に行き、亡くなった町ノ坪様を偲びながら部屋を掃除すると、衛兵のオッサンにそう言つて中に入った。その辺はオッサンにも聞いて、証言を得てるぜ。さてじゃあ、アンタはなんで奥の曲輪に入ったのか。それは簡単、証拠を隠滅する為さ」

「証拠つて、なんなんだ官兵衛」

「菊千代は、今の女の形で俺と会つた時、水桶を持つてその神社と井戸に水を撒いていた。一見普通の事だが、もしもその桶が奥の曲輪に置いてあつた水桶だとしたら意味が違う。それはつまり、犯行に使用された毒の入つた水だったから、処分しなくてはいけなかつた。違つかい？」

「毒の入つた……、水」

口を開いたのは又助でも菊千代でもなく、背後に控えていた新右衛門であつた。

「という事は、町ノ坪殿は水桶の水を飲んだのですか！」
「そうだ、聡いぞ新右衛門。俺の推理だところだ。まず菊千代は、町ノ坪に呼び寄せられた時、隙を見て、部屋の用心水の水桶に細かく砕いた砒石でも入れ、混ぜた。さて、これはまだ町ノ坪毒殺の第一段階、これで奴さんが死ぬ訳が無い。なんて言つたつて、いくら喉が渴いても防火用の用心水を飲もうなんて人間は居ない。菊千代は何事も無かつたように、お蝶さんが来た後に適当に料理の毒見をして帰つていった。」

この次が町ノ坪毒殺の第二段階に繋がる。菊千代は頃合を見て、

お蝶さんが去る時、町ノ坪に伝える事があると言って再び奥の曲輪を訪れた。これは俺も又助も見てるし間違いない。さ、その時アンタは部屋から出てきた町ノ坪になんて言ったんだ？」

官兵衛の言葉に対し、菊千代はただ無言で応じる。その緊張感に耐えられなくなったのか、背後に控えていたお蝶が口を開いた。

「た、確か用心水が尽きているので火の元に気をつけてくれ、と、菊千代さんが」

「違うな。それはお蝶さんが聞いていた訳じゃなく、尋問の時に菊千代が言ったに過ぎない。いくらだって嘘をつけるし、むしろその言葉自体が偽言フェイクでもある。その時には、用心水は尽きてないし、むしろ事件後も少しだけだが残っていた。俺はそれを覚えてるぜ。菊千代、アンタは部屋から顔を出した町ノ坪にこう言ったはずだ」

一拍置いた官兵衛の口元を、場の全員が注視する。

「大変だ、先程の女中が苦しみだした。毒かもしれない、そうなれば町ノ坪様も毒を含んでいる。私はこれから、侍医の先生を呼んで参ります。」

大体こんな内容だと思っぜ。さあ、それを聞いた町ノ坪はどうする？」

「焦る、か」

短く答えた又助に他の者も、首を縦に振って同意を示す。

「自分に毒が盛られたかもしれない。普通なら安静にするさ。だがここで、町ノ坪の手元にはある物があった」

「家宝の、毒消しの皿……」

「その通りだぜ禰子。毒消しの皿がどうい物かは解らないがまさ

か啜れば毒を消せるような代物だとは思えない。だとすればこうだ。皿に水を湛えて、それを飲み干す事によつて解毒効果を得る。これが一般的な方法だと、俺は推理するがな。だがここで菊千代は予め、自分が居る時に飲用の水を殆ど飲むなりして消費しておき、奥の曲輪に飲むに値する水を、一つに絞り込ませる。それが……」

「水桶の中の用心水！」

「さあ、その通りだお蝶さん！ これによつて毒を盛られたと疑心に駆られた者以外が決して口に含んだりはいしない、神妙不可思議な毒が町ノ坪の口に含まれる。最初から料理や飲料水以外に毒が入つてると想定すれば、あの蓬萊庵の爺さんも解つただらうが、生憎頑固な爺さんだ。毒つてのは、人が口にする物にしか入つてないと思ひ込んでるからな。とにもかくにも、これで誰一人毒見で死ぬ事なく、一体いつ何処で毒が服されたか解らない、そんな仰天の事件が完成した訳だ」

始終艶やかな笑みを絶やすこと無く、官兵衛の言葉を呑み込んでいた菊千代は、ここで初めて口を開いて

「でもそれは、全て官兵衛様の推論に過ぎませんわ」と、反論した。

「確かにそうさ、他の誰だつて水桶に毒を仕込む事は可能だし、町ノ坪が発作的に水桶の水を飲みたくなるかもしれない。だがよ、これはどうする」

そう言つと官兵衛は懐から、先頃お蝶から受け取つた紅白の包みを取り出すと、それを解き、中の綺麗な細工が施された団子菓子を手にとつた。菊千代から贈られたが食べはしなかつたというそれを、官兵衛は二つに割ると中から五耗程ミウの小さな丸薬を取り出した。

「これ、アンタが仕込んだんだろ？」

「官兵衛様！ それは、まさか……」

お吉がそこまで言った所で、お蝶は短く悲鳴を上げその場にへたり込む。

「まあ俺もそう考えたが、どうにも違うな、これは毒薬なんかじゃない。おそらく下剤かなんか、腹痛を起こす薬だろ、なあ菊千代？」
「せっかくあげたのに、食べなかつたんだね、お蝶さん」

菊千代に優しく話しかけられて、お蝶は身を強張らせる。既にお蝶には菊千代が気の許せる友人ではなく、町ノ坪を毒殺した恐ろしい人物と映っていた。

「ねえ、なんでそんな物をお蝶さんに渡したの？」

彌子が声をあげる。

「まあ、これは菊千代の慎重さから来る所だと思いがな、いわば回避策の一つさ。いくら算段を整えたって、最後は人間の采配一つで変わるような不確定な毒殺方法だ。町ノ坪が桶の用心水に目をやらないか、最初から毒消しの皿に気づかないかすると、途端に毒殺は不可能になってしまう。そうなった時、菊千代は無闇に毒が盛られたなどと町ノ坪に言った事になり、後で叱責を受ける事になる。

そうならないように菊千代は普段から菓子あげていたお蝶に、腹痛を起こさせる薬を入れた団子を渡す。これをお蝶が食べれば、なるほど毒を盛られたように腹を抱えて呻き出す。この様子を見て、菊千代はただの腹痛を毒が盛られたのだと早とちりして、町ノ坪に報告した、おつちよこちよいなカワイイ小姓で一件落着するって訳

よ

「なるほど……」

「だがその慎重さが仇になったみたいだな。この薬を作ったのは蓬菜庵の爺さんだ。こんな小さくても、爺さんは自作の薬って事で印を彫ってやがる。爺さんに聞けば、アンタがこの薬を所望したって事も解るはずだ。まだ惚けるなら、なんでこんな物を作ったのか納得行く説明が欲しいね」

そこまで来て観念したのか、菊千代は脱力して肩を落とすと短く息を吐き、眉尻を下げ幼い表情を作った。その表情に場の一同が気を緩めそうになるも官兵衛だけは確りと菊千代の目を、暗がりの中でも星明りを宿すそれを見据えていた。

「解せねえなあ、菊千代。なんでアンタみたいな若いヤツが、爺さんってもおかしくない年齢の町ノ坪を殺すんだ？まるで因縁が無いだろう」

「因縁なら、十分にありますよ」

言葉を切り、菊千代は後ろを向くと悠然と歩き出した。逃げるのか、と想像する者は居なかったが、尾を引く物があったので全員がその後を追う。

やがて十二所神社を越えて薄暗い藪道に入ると、その向こうに苔生した井戸が、夜の光明に仄かに照らされているのが見えた。

菊千代はそこで立ち止まり、井戸を背にして再び官兵衛の方に向き直る。

「私は、ここで生まれました」

「なんだって？」

官兵衛の言葉であるが、誰しも一様に同じ言葉を口の中に含む。

「ご存知でしょうか？ かつて姫路で小寺に対し謀反を企てた事件が起き、私の母は敵方の間諜として、町ノ坪に無残に責め殺され、この井戸に投げ入れられました。しかし母は死した後も、既に孕んでいた私をその胎で十月十日を育み、この井戸の奥底で産み落としましたのです」

「莫迦^{バカ}な、冗談が過ぎるぜ。それ以前に、その話は四十年も前の事だ。今のアンタはどう多く見積もっても二十歳越えたばかりの年増って感じた。在り得ない話だ」

「明^{みん}では、靈薬と言われる菊の葉に溜まった露を飲んだ子供が、七百歳になっても、その若い姿のまま生きたという話がございます。ではこの井戸も、十二所神社の由緒ある薬を滴らせる井戸。この井戸の水を飲み続けた身ゆえ、私はこのような若さを保っているのでございます」

又助と禰子だけでなく、お蝶もお吉も新右衛門ですら、菊千代の言葉を信じているのか、既に神妙な目付きで菊千代の方を見ていた。ただ一人、官兵衛だけが訝しげにその言葉を吟味する。

「そうかい、つまりアンタは四十年もその姿で姫路で生き、黒田家に仕え、町ノ坪が来たのを好機と見るや、あの皿を使って母の仇を討ったという訳かい。泣かせる筋立てじゃないか。だがよ、これは曾^{そが}我の仇討物語じゃねえんだ。アンタをふん縛^{そく}って小寺に差し出さないと、決着できそうもないんでな」

言うが早いか官兵衛は脇差を抜いて、菊千代の方に突きつける。

その行動に、今まで何処か呆けていた又助と新右衛門も弾かれたように刀を手取る。じりじりと間合いを詰める三者に対して菊千代は、焦る風無く井戸の縁をなぞりながら背後で見守るだけの禰子達に一瞥いちべつした。

「お蝶さん、楽しかったよ。これからも黒田の家に忠勤を尽くしなさい」

突然菊千代から話しかけられたお蝶は、首を振るでも無く視線を上下左右に散らし、最後に菊千代の方を見て、その口元が大きく裂けていくのを見た。

菊千代が高笑いを始めたかと思うと、たん、と飛び立ち井戸の縁に足をかけた。よもや、とその場の人間が想像をし始める頃には、菊千代の体は井戸の中に消えており、追った官兵衛と又助がぼつかりと開いた、井戸の黒々とした口を覗き込んでいた。

「チクシヨウ！」

官兵衛の叫びを呼び水に、突如、毒水にも見える黒い流れが井戸より噴き出した。それは無数の蝶である。以前に官兵衛が見た黒い蝶が、数百、数千の群れとなって井戸の底から飛び出してくるのである。

「な、なに！？ なんなの！ いや！」

少し後、お蝶の悲鳴が止んだ頃に、蝶のうねりも全て空へと散逸していった。後に残った官兵衛は、呆然と菊千代が身を投げた井戸を覗き込む。しかしそこに広がる自身の想像とは違う二つの光景を見て、低く唸つてからその場に腰をついてしまった。

一つは、ぼつかりと開いていたはずの黒々とした井戸の口が、今

や取り払われ宵闇の中ですらその一米程下に、しつかとした大地を見受けられる事。ようは菊千代の語ったような、人が投げ入れられて命を落とすような深い井戸でなく、水が湧かなくなった為に埋められた、単なる古井戸でしか無いという事である。長壁姫では無いけれども、皿屋敷事件という陰惨な話に尾ひれが付けられ、この井戸ですら怪談の一部になってしまっていたのだ。

「おい！ 菊千代は！？ なんて井戸の中に居ないんだ！？」

井戸を覗き込んだ又助が声を張り上げたが、それは浅い井戸の中でこたます。

もう一つ、官兵衛の腰を砕けさせた光景とは、その井戸の中に追うべき菊千代の姿が無い事であった。

ここで官兵衛には気づくべき事がある。姫路城は黒田家や小寺家にとって重要な城である為、万が一に落城した際に城の中から外へと安全に逃げられる工夫がいくらか施されているのである。

その一つに、城内の空井戸から外へと続く地下道の存在があり、今官兵衛らの前にある井戸にも横穴があって、酷くうねった道を通った後、やがて南に播磨灘、東に御着城、西に英賀と三方の出口に繋がっているのだ。これらの道に一度入ってしまうえば、如何に城を熟知した官兵衛であっても後を追う事など適わない。

つまり官兵衛らはここで、菊千代に見事逃げ遂せられたという事である。

「なんてこった、最後まで偽計だ。フエイクまんまと一杯喰わされた訳だ。それこそ、毒の皿をよ」

大団円

じわりと汗の引いていく感触に、黒田官兵衛は夏の終わりを感じていた。既に鳴く蝸の声も松木の間を抜ける微風に浚われて、散りに絶えていく夕、八代又助と禰子の二人が小さな竹箆を提げて、蓬萊庵の縁側に寝そべる官兵衛の前に現れた。

「なんだい、そりゃあ」

「変な蝶をね、見つけたんだよ」

禰子が竹箆の中から、黒い羽に白い筋を透かした蝶を優しく摘まんで出すと官兵衛の方に向ける。

「おっと、そりゃお前、菊千代が逃げた時に井戸から飛んでった虫だろう？」

「そこなんだが官兵衛。どうやらな、あの井戸の辺りでどうにもこの虫が大量発生してるんだよ。菊千代がそれを知ってたのかどうかは解らないが、井戸の中で羽化したコイツらが一斉に飛び立つのを見計らって、井戸の抜け道を通っていったんだろう」

又助の言葉を聞きながら、官兵衛は禰子から蝶を優しく受け取る。手の甲に止まったその蝶は、ゆらゆらと黒い翅を動かした後、ジッと止まる。

「ふむ。それで禰子、あの後菊千代の事、何か解ったか？」

「うーん、美囊みのうの方で似たような人を見たっていう噂はあるけど」

「美囊みのうといえば、別所家べっしょの三木城下みきだ。小寺から見りゃ、ばっちり

敵国だぜ」

「って事は、やっぱり菊千代君って乱波だったの？」

「だろうな。さんざっぱら俺らに話した因縁とやらも、作り話だろ
うよ。結局それで、俺らを煙に巻いて去っていったって訳だ。そし
て町ノ坪が死に、小寺と黒田の関係悪化を狙う、ってのが向こうさ
んの考えか？」

「だがまあ、小寺の方からは特に何も言われてないな」

「とりあえずはな。黒田は滅多矢鱈めったやたらに裏切らねえ、次は合戦でも
忠節を尽くせば認めてくれるさ。いや、それよりも城の抜け道を知
られたのが痛いな、これは改築するしかないかあ？」

そう言って官兵衛が笑うと、手の甲の黒い蝶も翅を大きく開いて
みせる。

「そうそう、それから新右衛門君が官ぢやんの側に仕えたいってさ」
「へえ、そうかい。ま、事件に巻き込まってしまったのは悪いからな、
それくらい構わないさ」

官兵衛が顔を襦子の方に動かした時、夕風を終えた強い風がちよ
うど吹き、それに乗って手の甲にある黒い蝶は、ひらりと空へと舞
い飛んだ。その様子に官兵衛は以前に見た、菊千代の黒髪を思い出
した。

この虫がジャコウアゲハと言う名で、その身に毒を持っている蝶
だという事をこの場の三人は知らない。また後年、この虫が大発生
した折、その蛹が後ろ手に縛られ、吊るされた人間の姿に見えた事
から、かつてこの地で責め殺された女中の名を取って、お菊虫と呼
ばれるようになる事も、知らぬのである。

「ぬ、そういえばお蝶さんが謝りたい事があるとか言っていたな」

「へえ、そうかい」

「なんでも、大切な皿を割ってしまったんだと」

「ま、事件に巻き込んだのは……、悪いからな。それくらい構わないさ」

一枚、二枚、三枚、四枚……。井戸より聞こえる声は無かれども、姫路城の台所で割った皿を数える、お蝶の声が聞こえた気がした。

<了>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9501m/>

黒田官兵衛推理録「播州姫路毒皿数」

2010年10月11日05時22分発行